

## 「合評会『病いの会話 ネパールで糖尿病を共に生きる』 (中村友香著、京都大学学術出版会、2022年)」 解題

美馬達哉

(立命館大学大学院先端総合学術研究科)

本特集は、2022年11月5日に、医療社会学研究会主催、生存学研究所共催で、龍谷大学梅田キャンパス（ハイブリッド開催）で行われた合評会の記録である。なお、本企画は、立命館大学科研費獲得プログラム（2022）の支援も受けている。

本書は、ネパールでのフィールドワークに基づいて、「糖尿病（シュガー）」をめぐる／ときには糖尿病と無関係に繰り広げられる会話を分厚く記述した医療人類学のエスノグラフィーである。

本書で描かれた糖尿病は、生物医学的に定義された「インスリン作用の不足による高血糖」とは大きく違っている。それは、本人、家族、おせっかいな(?)隣人、クリニックの医療者、薬局の医療者、専門病院の医療者、アーユルヴェーダ医療者のそれぞれによって、異なりつつも部分的に重なり合うやり方で生きられている多重的な存在といえるだろう。

ネパールの糖尿病が、個々人の説明モデルや信念や病氣行動ではなく、人々の「間」やコミュニティでの生活実践から生成することを、著者は「病いの会話」と表現している。「病いの語り」でも「病いを主題とする会話」でもなく、ポリフォニー的な「病いの会話」とは何だろうか。

当初の合評会のテーマの一つはそこにあったが、実際の議論の中では、さまざまな方向に広がり、「病いの会話」をめぐる会話へと発展していった。

コメンテータとしてお願いしたのは、生物医学的な（つまりは日本での通常の）小児糖尿病の看護に関わりつつ人文社会系の研究をしている高橋花子さん（立命館大学先端総合学術研究科院生）、線維筋痛症の「語り」を医療社会学的に研究していた本間三恵子さん（埼玉県立大学健康開発学科准教授）、看護倫理の観点からターミナルの研究をしている柏崎郁子さん（立命館大学先端総合学術研究科院生）をお願いした。

医療社会学研究会のメンバーの佐藤純一さんからは、ネパール訪問での経験も含めて、いつもながら、鋭い多角的なコメントをいただくことができた。

なお、本企画の主催である「医療社会学研究会」は、月2回を目安にハイブリッドで研究会を開催している。「来る者は拒まず、去る者は追わず」のモットーのもと、参加に関しては、事前連絡・参加費不用で活動している。医療社会学研究会メーリングリストへの加入をご希望の方は、sociomed.m@gmail.com（本郷正武（桃山学院大学））までメールをいただきたい。

では、合評会の様子をお楽しみください。

### プログラム

医療社会学研究会主催合評会（立命館大学生存学研究所共催）

『病いの会話 ネパールで糖尿病を共に生きる』（中村友香著、京都大学学術出版会、2022年）

○日時 11月5日（土）15:00～18:00

○場所 龍谷大学大阪梅田キャンパス（梅田ヒルトンプラザウエスト14階）研修室

### ○著書紹介

中村友香（筑波大学人文社会系助教）

### ○コメンテータ1

高橋花子（立命館大学先端総合学術研究科院生）

### ○コメンテータ2

本間三恵子（埼玉県立大学健康開発学科准教授）

### ○指定質問

柏崎郁子（立命館大学先端総合学術研究科院生）

### ○総合討論

### ○司会進行

美馬達哉（立命館大学先端総合学術研究科）

